
俺とモヤシ < 4000文字 >

泰然自若

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺とモヤシ<4000文字>

【Nコード】

N0151N

【作者名】

泰然自若

【あらすじ】

人を殴るのが楽しかった。喧嘩が楽しかった。それだけで十分、俺の毎日は面白かった。あの日、アイツに出会うまでは。

（前書き）

勢いで書いた。

これ元に、もう少し長くする予定はありません。
流石に粗いので……。

ある日、俺は奇妙な出会いをした。

何故か興味を持った。

軟弱でひよろひよろとした野郎で、俺に媚び諂うクソみたいに付き纏う自称舎弟どものパシリだった奴だ。

そんな野郎の存在すら俺にはどうでもよかった。

強い奴に喧嘩ふっかけて殴り飛ばして、俺が強え事を証明したかっただけだ。そんな行動をしていくと次第にクソみたいなやつが慕いだす。

迷惑な時もあったが、奴らは強い奴の情報を持つてくる事ができた。だから俺は奴らを飼ってた。適当な躰は施したが、後は勝手にやらせた。

徹底させたのはてめえのケツはてめえで拭く事。

俺は、面倒事が嫌いだ。

そういつているのに、助けてくれと懇願する馬鹿が来る。喧嘩なら金よこせばぶっ飛ばしに行ってたがな。

そんな日々を送ってた。

何故かって言われても、それが楽しかったからとしか言えない。

道場とかボクシングとか。

ガキの頃から手が出るのだけは速かった俺を親はそういったモンに
いれて直そうとしたのかもしれない。

俺にとってはそれなりに楽しかったが、時期に俺より強い奴が居な
くなった。世界とか全国とかそういうの目指すほど熱血してたわけ
でもねえからクソつまらない日々を送ってた。

切欠は簡単なもんだ。格闘技やっているからってえ理由で金貰って
助っ人さ。

二十人相手にこっちも同数。途端に入り乱れての乱闘になった。

その時、俺の中で何かがあふれ出て全部知った。

俺は心底楽しかった。

殴り蹴り、殴られ蹴られ。相手の顔を潰し俺の鼻を折る。そんなド
ロドロの喧嘩っていうのが心底楽しかった。

だから、俺は今の日々に満足している。仕事しろとかも言われねえ。
かといって極道に行くわけでもねえ。

今は今だけを考えている。どうせ俺の高校は行く所なんて決まっ
てる。

だからこそ俺は俺の人生を。俺の高校人生を喧嘩で生きる事にした。

そんな時。そんな時だ。

そのひよろひよろしたパシリ野郎を眼に止めた。

奴は殴られてた。買ってきたモンがちげえという理由で。殴られてた。

だが、そうじゃなかった。

思わず、笑っちまったぜ。

あのもやし野郎は殴ってもらっていたんだよ。

マゾでもなんでもねえ。殴られるまであいつは眼をずっと開いてた。

殴る野郎がどんな軌道で何処に目掛け拳を持ってきているか。全てを見逃さないように。

「おい」

「あ、ハルヒコさん」

「こいつ借りるぞ」

「え？」

驚いたように声を洩らしやがった。叱られる餓鬼みてえなうぜえ顔しやがってよ。

「ああ？」

「あ、いえ、どうぞ。おら。行けよ」

「おい、付いてこい」

俺の言葉にもやし野郎は素直に従った。

しばらく歩き、誰も居ない駐車場に入った。

奴は何処からどう見ても弱そうだった。日には焼けている。だが、素肌が見える腕は太くもなかった。

だが、どうだ。対峙してみるとコイツはあ、面白い。動じない。物怖じしない。

「なあ。おいてめえ。なんであんな事してんだよ」

もやし野郎の眼が変わった。良い面構えになった。

喧嘩してきたどんな野郎よりも良い面だった。いかつい訳でも強面でもない。

普通の男だ。何処にでも居そうな野郎。

俺だって、今の今までの場面を見るまで気にもしなかった。

もしかしたら何度か会っているかもしれねえのによ。

「君、強いね」

開口一番！

不敵だぜえ。ますます気に行った。面白い野郎。

「はっ！ 良いねえ。その面。やろうぜ」

「良いよ」

構えも無し。正直ムカついた。

何処か余裕のある笑みを浮かべやがったその野郎に俺は一気に踏み込んだ。

挨拶代わりのジャブを送り込む。

野郎はワンツートを綺麗に避けやがった。

続けざまにフェイントを入れる。

左フックを匂わせながら、前蹴りを腹に叩きこんでやった。

叩きこんだ。だがよ。それはねえぜ？

「マジでやる奴いんのかよ……」

思わず本音が零れ落ちやがった。

野郎は当たると同時に後ろに跳びやがったんだ。

そうとしか考えられない。感触がそうとしかいってねえ。

「強いよ君。だってあんな速い攻撃して、俺も一瞬の判断で入れた。凄い」

何かが切れた。ここまで余裕綽々な野郎は見たことねえ。

俺は強い。この野郎も強いのは知っている。

だから、切れた。

「余裕かましてんじゃねえぞ……！」

一気に間合いを詰めたのは俺のはずだった。

なのによ。どうしてだよ。

「まだまだ」

なんで俺は、空を見ているんだよ。

「強くなれるよ。君。素直すぎるからね。筋がね」

そういつて、もやし野郎は良い面で笑いやがった。

これが、俺と綾瀬一人との出会いだった。

「なあ。何やった？」

「間合いつめて投げた」

「はあ？　なんだよそれ、見えなかったわ」

「うん。姿勢を低くして、君の腕を下から掴んでそのまま勢い殺さずに」

「近藤。近藤晴彦だ」

「綾瀬。一人。「ひとり」って漢字で「かずと」っていうんだ」

「おう。カズト。てめえ。武道やってるな」

「まあ、ね」

テレビに出る金とか宣伝目当ての野郎どもとのギャップがひでえと思った。

「なんでだよ」

「え？」

「なんでパシリなんてやってんだよ。てめえ。強いだろ」

「うん」

俺は身体を起こし、胡坐で座った。そうすると一人も隣に座った。さっきまでの空気が何もなかった。

途端にこいつは別人なんじゃねえかってほどに。

「言えねえなら。いい。」

「修行」

「はっ？」

「だから、修行だつて」

修行、修行と来たか。俺はたまらず大声で笑った。古風だな。それでいて律儀な野郎だぜ。

「笑わないで」

「いやあ、すまん。あまりにも面白くてな！」

「必要なんだから仕方ないだろう。僕だつていじめられたくていじめられているわけじゃない。」

「理由あつてか。にしてもよくやるぜ。俺なら即座に殴り飛ばしてる」

「うん。でも、耐えなきゃいけないのも修行だから」

その言葉と、カズトの顔が今でも焼きついてる。

悲しいそうな。それでも、何処か覚悟している。一本細いが、真つすぐ何かが通っている。

変な感じだった。

「なあ。おい。一発殴らせろ」

「……良いよ」

それからだ。

俺とカズトは何かとつるむ様になった。表面上は俺の専属パシリだ。手は抜かねえ。

だがよ。それでも俺は俺で楽しかった。カズトもカズトで楽しんでたんだろうよ。

初めてかもしれねえ。友達だって、思えた奴は。

喧嘩は今まで通りやった。そこにカズトも連れて行った。数合わせだとかいって。

で、カズトは殴られて蹴られてた。

痛がつて、蹲つて、辛そうにして、俺以外が消えるとケロッとしやがつて、笑いやがる。

「ハルの方が何倍も痛かったよ」

そんな事言いやがつて笑いやがる。

そんな面白い奴と出会えて暫く経つて。

「どうした。お前はそれでも、一人の友ではなかったのか」

なんで、こんな所で地べた這いずりまわってんだろいうな俺は。

なんのこつちやねえ。

カズトに修行を科してた野郎がカズトの親父で、カズトが俺とつるんでるのがばれちまってこんな事になった。

曰く、俺は修行を阻む輩だそうだ。

だったらよ。言葉で言えや言葉で。俺が言えたもんじゃねえけどよ。道場連れ込んで、師範の親父様とタイマンたあなんだこれ？

「いつてえな……」

「お前は痛めつけられる理由になるほどの事をしたんだ」

「だから話せよ。それをよ。本当に俺が悪いなら、謝ってやったんだぜ？」

もう遅い。ぜってえぶつ殺す。

なんて、息巻いたのは本当数分前か。今はもう、身体がうごかねえ。何回ぶつ飛ばされたか覚えてない。

「言う必要はない」

「なあ。おいてめえは、何をさせてんだよ。一人によ。アイツは」
ふとした時に悲しい顔してんだよ。殴られた後も。影であいつは人

を殴っている。そんな事をした後も。

決まってアイツは泣きそうな顔してやがるんだよ。

「なあ、おい……。アイツの事を考えてやれよ。親だろうが。アイツの話聞いてやれよ」

「お前には関係ない話だ。今後、一切関わらないと」

うぜえ。

「うぜえ……。んだよ！」

顔面をけられた。ああ、骨やつちまつたぜ。

もう痛みもないが、冷たい感触が折れた事を教えてやがる。

「てめえよ。親だろうが。俺は、よう。アイツのダチだぜ……」

だから、なんだろうな。俺はカストのダチで。だからなんだよ。

「俺はよ。俺の……。たった一人のダチなんだよ。勝手に、奪おうとすんじゃねえぞ」

そこから俺の記憶はない。

あるのは白い天井があつて、俺が傷だらけで。

横でカストが泣いてた事。

そんだけ。

「おうカズ。なに泣いてんだよ」

「ハル。ごめん。ごめんなさい」

「おう。謝罪なんざ糞食らえ。おいカズ。てめえは俺のパシリだ。俺のほしいもん買ってきてな」

「ハル……。ハル！ うん。待ってて、すぐ買ってくる！」

パシリが笑いながら走っていく。

変な姿だぜ。

笑うと顔が痛んだが、どうでも良かった。

あれからどうなったかは判らない。病院で寝ていても親父さまはこなかったし、カズトは何も言わなかった。

まあ、俺が問いたたださなかったのもあるかもしれねえ。

だがよ。

あの一件以来、カズトは良い面見せて、笑うようになった。

そいつだけが、良い事だったぜ。

今でも俺はカズトをパシリに使っているし、カズトは今でも殴られている。

それでも、今までのようではなくなった。

喧嘩を吹っ掛けて来る奴をボコボコにしている。

何でそうなかったかは知らねえし、どうでもよかった。

ただ不満といえば、カズトが強すぎるってえ噂が出すぎて俺とカズトのコンビに喧嘩を売る野郎が消えちまった。

それだけが残念な事だったが。

俺は、今の普通っていう生活も悪くないって思っている。

だからよ。

俺は、今の生活で、満足している。

「ハル！　遊び行こう！」

「ハルヒコさん。ボーリング行きませんか？　カズトがどうしてもスコア百以上にしたいって駄々こねて」

「絶対出す！」

「カズはもつと腕つぶし鍛えろよ。強いけど全然強くない」

「ま、確かに。飯食ってでかくなれ」

「た、食べてますよ。」

「おう、カズトはな。牛乳2？も飲んでるけど背が伸びないの！」

「ああ！　なんで言っちゃうの！」

「おっじゃあ！　今日は全員でボーリング大会といこうじゃねえか！」

「おお！」

いつの間にか、俺も。

ダチが増えたもんだ。

（後書き）

ファンタジー物になるか。普通になるか……。

何故殴られているのかの解明で化け物と実は戦っている系統か純粹に古武術の修練で家系が厳しく。ないし家訓で決まっているとか。

むむむ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0151n/>

俺とモヤシ < 4000文字 >

2011年5月6日10時09分発行